重修真書太閤記

八編 九

へ13
459
79

へ13 特
門 8 8
號 459
巻 79

ゆ
云
すの

山
ぬき足
にが陣所
深夜のこと
ゆ聞耳あて
聲を低くしい

門 8
號 459
巻 79

重修真書太閤記八編巻之廿五

宇野忠左衛門尉山路将監を偽欺事
并山路将監慾心増長の事

去程に宇野忠左衛門尉ハ柴田勝家が為なりとて佐久間玄蕃允が説に従ひ只一人夜に紛れ堂木山の陣中へ忍び入何処が山路が役所なるとぬき足さし足して尋ね求めゆくゆくにして山路が陣所に至り柵門をほとほとと音信しに如法深夜のことと云ひ用心厳しければ山路が家人早速に聞付なにものなるぞと咎められれば忠左衛門聲を低くしい

同攷會印

Ist Weizen…
gekocht, so ist es
weich.
Wird Trommel
geschlagen, so ist
es lebhaft.
Auf dem Hakuo-
gebirge giebt es
jetzt keine …

… es wirklich
Wahrheit ist, dann
ist man …

III/81

や苦しからざるものぞ将監殿が宇野忠左衛門が参りて候と申べしと云ひ入るゝに此程までも越前にてハ朝夕に出入して睦ましかりし忠左衛門がことなり下部までも面を知る敵となり味方と分れても何か隔つべきと将監にかくと告れバ将監も日頃なつかしき宇野が来りしとき〻飛立つほど思へども今ハ互に志のぎを削る中なり人の心も知ずたやすく面會その憚あるよにいらへ断いふで返すべしと思ひ定め我家人に口上を申含め柵の内より忠左衛門殿にハ態ぞ入来ありしなれ御心ざしのほど過分に候さりながら何の用なく

御入にや殊に夜陰と云ひ面談ハ人の批判も候べし因て御なつかしさハ申もかぎりなく候へ共是へとも申さず候誠に心の外なる世のありさまと御思ひ合せなへかしかくすぐも御入のほどかゞしはなく候御用のかさをも承知仕さくと云させしかバ忠左衛門なしかへし世のつゝましさハ是方も同じをに候それをバ思ひ候ハず夜陰に参り候とハ幼稚の昔ハいふに及バず壮年のこの頃までも朝晩に親しみ寄り候を忘れ不申定めし御忘れもなるまじく然るに計らず此の如き世となりて候へバ今日か明日か戦場の土となるべき身に候然

ば快く一盃の酒に長夜の闇を晴けさく存ずるにより此のごとく一瓢を携へて参りし我等二人ハと同郷に生れ然も同年にて仇といひ讎と呼るべきをハ覚えず候さりとも取次の者ありのまゝにては将監もあまりにあつかしくてすのごしに聲をかけしも聞ずやと思ひ忍びて柵のかたはらに立つれバ忠左衛門が口状おちもなくきゝて何様と思ひ返し自ら柵門をひらき宇野殿にて御入あれ御渡のよし承り及び何となく昔の恐なれせめて御聲をかけりにても聞ばやと存じ是まで立出てしが御心も我心も同じをにし是へ

御入あれへ敵とも味方ともいさゞ越前の家にありし心にて一時御身のがさりを承りしべくとて手をとれバ忠左衛門も将監どのにて御さとりしりいざゝらバとく帯劔を取て将監が家人にこたし小座敷のうちへ通りて見るに左右近習も遠ざけ只二人さし向ひとなりて将監申けるハさても貴殿と某同年と云ひ同郷に生れ竹馬の昔より朝に夕にあれあそびし兄弟にも勝りさる心中ハいはずとも互に知れたる事なれば某伊賀守に付られつれバ心ならず長濱へうつり住しところ伊賀守筑前守に一味同心せしにより我々までも筑

前守の方人とあり此城中にいるを誠に本意なら
ずよつて越前のを恐ろしくかつ正作の恩を忘れ
ず候へ共今ハかくて候へバ思ひ候ばかり為べき
方便もなく一日〳〵と過し候に今宵ハはからず
御入にて日ごろの思ひを晴し候明日討死致し候
とも心の残りなく御持せの瓢御開き候へ肴を求
め出しもべしと云ひて實に餘念なければ忠左衛
門もさてハ将監いまだ越前のを忘れずなり然
ればこれが心を動かさんを難からじと思へバ早
説なさる心地せられしまゝかの瓢とり出しての
酒こそさの太勝家の賜なりしところなれと云て

さし置バ将監手にとりて之をおしいたゞき宇野
殿の御深志によりむからぬ主君の賜なりし酒を
なさりいでゝ之を肴にと云ひつゝ取出すを見れバ
鮒の大きさ一尺にあまれるなりそれより瓢の酒
の盡るに及びて忠左衛門も今如何に将監どの
竹馬の好を思へバ敵も味方もうちとすれたるの
みならず忠も義もいふに及ばず又一瓢の酒に一
座の酔を催してこし方行末を思ひめぐらすに山
路どのまさに正作の恩をおもひめさるならバ何と
て筑前守にハ従ひめふぞ正作ハ伊賀守にこそ付
させめひつらめ筑前守に従ひめんとハいそれざ

りつらんといへバ将監いや伊賀守に従ふ身なり
伊賀守筑前守に一味してくれ候へバいかで否といはた
るべきやと云ふ忠左衛門きいてそれこそ山路殿
の心の足らざるところなり伊賀守が筑前守に従
へと云ひつる時何とて匠作へ御をそりハ仰せら
れ候やそれ御覧候へ貴殿の行状足らざる所に
りとすべしと云へバ将監さしつまり何にも宇野
殿のいえるゝ旨道理に叶ひて候始めハ匠作へも
て見むやとも存付候へ共大鐘藤八神谷越中始め
いづれも筑前守へ無二の志を運び今度越前を打
ほろぼし候ひなバ匠作の知行を配分せん時丸岡
を充行ふべき由筑前守申て候により今の世の侍
ハ渡りものなり一城の主となり多くの所領を得
んと又五十年の楽みと思ひ付て一味せしなりと
いふ忠左衛門申す丸岡の城御所望むかりふく
年来の主君に向ひ弓矢をとりぬふとや志からバ
丸岡の城に忠義をかへく末代に不義不忠の名を
■流しぬふとやべしさほど惜しき丸岡の城にはゞ
忠義と云をれくも御手に入可申ものを浅まし
はさましと云ひて咲ふ将監聲をひそめ何と云ハ
るゝや忠義といをれて丸岡の城主になるべき方
便なりとハいかなることにやと問そのとき宇野藤

すりよせ真實に丸岡の城主になしたまはゞ越前へ
御帰りなさるべきやと詞を推バ將監真實越前の恩
を忘却せざれバ今にもあれ越前にて帰れと云され
ばなんぞ争で違背申べきまして丸岡城主にと
ならんにハ此砦を焼立て返り忠仕り候ひなんも
のをと云を聞て宇野がいふやう其御詞に相違な
くハ竹馬の好みあり不忠不義と云るゝ友を忠
義の侍になしあたへしやべしと云バ將監忠左衛門
を伏しおがみ同郷同年の懇志とハ云ひながら左
ほど深切に思ひくれる友垣も又稀なるべし願ハく
ハ某をすくひあひ近作の御前よろしかるべくとり持

たまふて丸岡の城主になしあたへよしそれ程になく
とも近作の事ハ恐れやさん能々肝煎なくへと云ひ
けるにより忠左エ門立帰り玄蕃にかくと云へバ
玄蕃大によろこび直に近作に告て伊賀守が領せ
し丸岡八万石に大野郡四万石合せて十二万石の
目録を書き朱印を押して忠左衛門に渡しければ
忠左エ門これを懐にして再度將監が陣処に至り
將監に面會し昨夜云れし趣を近作に語て候へバ
近作も貴殿をハ能々惜思れ候と見え大に悦ばれ
真實に味方へ返り忠なされ候ハゞ丸岡八万石
に大野の郡四万石を加へて充行るべき由申さ

れ朱印を出しあふにより恭ろけさり参りてハ是御覧ハへとて目録を出し見せしかバ将監も心中に肝を消し我筑前守に従て本意の如く柴田を滅ぼしたりとも約束の丸岡八万石を大鐘神谷三人と分て領するなれバ一人三万石に足らだ返り忠しく直に十二万石を得んとハ實に雲泥万里と云べしと決着し忠左エ門によく〳〵口固めし返忠の方便を相談して宇野を返しけるにより宇野ハ又この砦の案内をくハしく見分しくぞさちかへりける

山路将監今井野村を試る事

并今井野村使節の事

宇野忠左衛門尉を搦門より送り出してのち山路将監つく〴〵思ふやう不思議なる友達の懇志かな又有がたき故主の恩義かな我長濱へ来りしとも北庄にてハ多分の侍のとなり俄に出身せんことまとに難し伊賀守方にてハ寄騎なり何どにたりても早く役身べしと我身出頭のさめなりき然るを故主の厚き思召といひ丸岡の城主になされ十二万石の所領を与へんとの朱印を出されしこと夢に夢みし心地ハせらるれどさらにたちまちにハ行らざりき左内どに我が身を頼みしかりあふ主人

への土産かつハ傍輩どもの思ふところ第一に忠
左衛門へ對しても徒手にてハ如何なり然バ木村
小隼人蜂須賀彦右衛門父子を討とりその首を持
て土産とせばやと思ひ付しかども三人とも武勇
といひ智謀と云ひ容易にハ事を遂かたしいかに
せましと思案しけるが越前より連れきたりし侍
どもの内にハ彼と思ふものもなし長濱にて抱へ
りし新参の侍に今井角右衛門野村市内と云もの
あり両人とも力あくまでつよく劔術のはやわざ
十廿人にも勝れたるものなれバこの二人と自分
と三人して木村蜂須賀父子を討んことハこゝろ

やすしと思ひさだめさて両人をよび寄せさま〴〵
のもの語りに時をうつし茶を飲ませ菓子を与へ
そのうち将監申けるハ我今度一大事を思ひたち
たりそれに付その方二人ハ新参なれども器量と
いひ心中といひ世にたのもしく思ふにより今夜
こゝへ召出したり何どにもなれ其許が申談ずると
違背すましきや如何と云ひければ今井野村顔見
あはせ今井ハ如何其許に於てハ御請申と野村が云へ
バ野村ハ如何某に於てハ何とて二心なるべきと
今井が云を将監さも嬉しげなる顔色して左いふ
からにハ疑ふべきにあらねども誓紙をかくべし

とて牛王を出し前書ハかう〳〵と書記し二人が前
にさし置ハ二人とも読て見て主人の仰をそむく
時の天地の間に有べからずいざ〳〵と云より早く
野村と今井小刀を取て小指を突き切り名判の上
に血をそゝぎてぞ出しける将監これを一覧し此
上ハ何か心を置べき其方共も知るごとく我ハ元来
柴田の侍なり伊賀守の寄騎としてこの長濱にいた
れども心ハ北庄を慕ふものから近作もまた某を
思ひ忘れぬゆゑ因て今度某を召返さるなりその
召返さるゝにハ今まで伊賀守の所領せし丸岡
八万石に大野郡の内四万石加増せられ十二万石

を宛行ふとの朱印を出されたり然バ其方どもを
も五千石以上の身となしつかはさるべしよろこび
ゆへと云バ両人共殿ハ大身になり給ひ我〳〵迄
も五千石以上とやすハ盲亀の浮木優曇華の花よ
りも得がたき大幸福にはたゞしそれほどに近作
の思召さん処へ殿にも徒手にてハ如何往せある
べき御土産にハ何をか持せあふやらんと云によ
り将監いかにもそのとほり自然にもいろ〳〵考へ
つれども木村と蜂須賀父子の首にまさるものなら
どこの三人を討べく思ひ立ちつれども某一人にて
て三人をも討さんを容易からしその方二人しく

蜂

須賀父子なりとも共木村なりとも其場の便宜次第仕
るべしこのことをや好んとて誓紙をも望みしなり
といへバ両人共心中にハ深く驚くといへども更
にこれを色に出さずこの両人ハ羽柴筑前守の侍
なりけるが伊賀守の筑前守に一味せしときより
山路が心を氣づかふて浪人分にとりなし長濱へ
来りて奉公をのぞみしに山路その武藝をよろこ
び抱へけるなり元より山路を窺はん為に入こみ
しものへかく浅々しく一紙の誓紙に心をゆるし
うちとけけることそはかなけれ今井野村ハ将監が
傍へすりより心得ては御氣遣なく思し召すべし

何時にても殿のなそむしは時御先に仕るべくは
志かしながら両人を如何して一時に御討なさる
べく思召はやと問バ将監よくこそ心付れ是ハ
明後朝三人を招き數寄屋をかこひ茶を飲すべし
そのときに三人を一時に討果さんと思ふなりと
云により野村今井の両人ハ詞をそろへ何さまよ
ろしき御計略にはそや御三人の許へ御中入なり
しにやと問ふ将監いやとよ討手を定めしのちと
思ひいまだ中入ずと答へければ野村今井の両人
さらバその御中入の御使より我々両人勤め申べ
くはと云を聞て将監かぎりなくよろこびさらバ

その方両人にても合せ相勤むべく候口状は当表
御出張すでに数日に及び候定めて御徒然に渡ら
せあるべし此方とても同様の御をには勝家も出
陣いたしたく候へども切かゝる気色も
見えず候筑前殿御隙明次第御帰陣を待つと存候
ところ是はさいつごろにあり可申哉御さゝ及び
もはやらん然バ合戦の期いつとも存じられず候
去ながら双方共に矢合せの後は少しも暇ある
まじく候此間のうちに参会いたし快よく鬱散致
したく候幸ひ湖中の鯉ならびに鮎の類多く到来
その上に若狭小鯛など見え候間御三人を請一献

を催し候かならず御同心候やうにとくれ〴〵
申つけ候と申せと申含められバ両人とも一義に
も及ばず承知し今井は蜂須賀彦右衛門の陣へ野
村は木村小年人へ参るべく候と定めて其座を互
に別れしとなり
甫庵本に本山の要害に心を變ずるものある由
誰共なしに云出しかば木村小年人佐を本丸へ
入大鐘藤八郎木下半右衛門山路将監を外曲輪
へ出し用心きびしく見えし処に山路卯月十三
日の朝小年人佐へ茶をまゐさんと約し用意させ
りあり此企は木村を討て柴田が勢を本山へ引

入んとの隠謀とかや然るをその夜の子刻むか
りに木村が門を叩くものあり誰ぞと番のもの共
問ひければ本陣より急用のをふく有ぞまづ門
を開き候へといひしまゝ隼人にその旨告し処
に大崎宇右衛門尉さゝ候へと有しかバ則出向
ひ何用の御をぞ承り候べしと云しときいや
御本陣よりの御用にハあらず候伊賀守の具臣
野村勝次郎これまで参りさる由申候へと有に
より大崎立かへり其由申ければ去バ内へ入よ
とて近習十人ばかり野村が左右に従ひ屋裏へ
入しかバ野村刀脇指を大崎に渡しひそかに申

上にそんと申をり立より私語けるハ山路将監
心変じて候明朝御茶を申数寄屋にて御遍を討
奉り本山城へ柴田が勢を引入んとのことに相極
ありたる由云ひければ木村じにさも有らんと
覚えよりさらバ只今逆寄によせ打果すべしと
有しを野村承り先蒙氣のよし仰つかハされ
相延され明朝御仕かけ候ハど同類残らずうち
果され候ハんやと指図せしかバ尤なりとて山
路方へ俄に虫さし出痛み候間明朝ハ参るまじ
き旨使者をつかハしければさてハ此こと推量有
しあり反り忠を心元なく思ひ密談の者ども誰れ

かれと呼ふ野村勝次郎ぞ居ざりける反忠此奴
なんめり時剋移りなバ悪しかりなんと長濱の
宿所ふ母や妻子とも有しをバ山路が甥と旧臣
二人つかまへし船ふて早く退ゆへ財宝等ふ少も
損かまはんで時も早くのきゆへとて出しその
身ハ密談の同類三人同道し雞のこゑをしめて
きこゑしありふし落ふけりとぞも
又一本ふ今井角右衛門尉本名ハ稲田四郎左衛
門とて濃州郡上の稲田なれバ稲田九郎兵衛と
同姓しといへ野村市内といへハ林与左衛門が
ことかや後ふ三好孫七郎ふ仕へそのゝち朝
鮮へ渡海して軍功ありしを堀内安房守の書翰
ふ見も林六郎光明の後なりといへりなほくハ
志きをハ次々ふみえたり

重修真書太閤記八編巻之廿五終

重修真書太閤記八編巻之廿六

今井角右衛門内通の事
并山路将監北越陣へ退去の事

山路将監正國はじめハ大谷慶松の游説に迷ひ羽柴筑前守に一味し後にハ宇野忠左衛門が糺明に欺れ且丸岡十二万石の富を利として木村蜂須賀を討んことを謀るまでに仁義禮智によることを能はず只利のみ是争ふ戦國の風と云ひながら又勇士の恥るところあり宜なるかな忽ちに其母と妻子を殺害せらるゝこと又自身手を下せしと同じと云べし

且その新参の士を鑒る能はず却てそれが為に欺
るゝと抑人を知るの識すぐに亡びさりと云べし
爰に野村市内ハ木村小隼人佐が陣に赴き今井角
右衛門ハ蜂須賀彦右衛門の陣に至り案内しける
に本丸外曲輪と懸隔るとハ云ものゝ同じ味方の
ことなれバ左のミハ心も置ず居間の庇へ通し何事
にやと問へバ角右衛門謹で申けるハ主人将監が
付てニ久々の御在陣さぞかし御徒然さるべし将
監事も誠に長日を暮しかねニ然るに知人ニて湖に
中の鮮魚数頭送りこしニ処へ若州の同姓より小
鯛多くさし越ニ其上都の一族とも北野の上酒一

樽贈りニを無下に一人給ニも曲なくニ木村殿へ
も申入てニ哀れ明朝未明より御父子共御入被レ下
ニせど樽を開き鮮らしきを割ニそ一盃を勧め此
ごろの欝散仕りたくニと申も果ぬに
彦右衛門尉山路の使者今井角右衛門とハ其方が
其方山路譜第の侍か但抱入のものか見知らざる様
に思せらるゝぞやと申により角右衛門蜂須賀殿に
ハいかなる御穿鑿をなされニ譜第のものにても抱へ
入のものなくも山路将監の使に相違なくニ将監
が申入ニ御返事を成されニて後に左やうの雑談
にハ及ぶべきにてニと申せハ彦右衛門尉悪し

角右衛門其座ハ立せじと切てかゝる角右衛門飛
退きこれハく蜂須賀殿左右に御せき成され
候ハ如何なる御心入にや某将監に近きころ抱へ
られ候美濃侍に候御見知も有べく候併それハ使
者に就て入用なしたとへバ書状を以て申入候も
ん時に此料紙ハ何処の所産と御不審あるべきや
能々御心を静められ将監が申入し口状の御返事
を承まりまで度と申せバ彦右衛門又しても左右
のことをいや返事ハ此方の胸にあり其方の差図に
及バしと云角右衛門その御胸に包みめふ御返事
きうけぬまり罷り帰て将監に申さずハ使者の役

立申まじく候これ式のこと知食めされぬ蜂須賀どの
にハおそれましまさん候に左右にそおり仰せられ
候とハ世にも不思議に奉存と申けれバ彦右衛門
この方にても軍ハなし日々退屈いたし候但彦右
衛門などハ長濱をとり久しく住されバ懇意知
音も多く殊に都にハ傍輩なまさおり然るに何方
よりも小鮒一ツ贈るものもなく都の傍輩よりも
陣中へ見舞ハ無用との定めにより誰よりも申越
となく樽など贈るを絶てこれなき定めあり然る
に将監長濱に住を久しからぬに湖中の鮮魚数頭
を得しと云を尤以て不審なり且かくの如く処々

小陣を張バ湖中の猟ハ別して幸なるべからず幸
なきに馴染も薄き山路に魚を贈りしと云て更に
其心を得ず若州より便宜と云も疑はしきことし
若狭国より此国へ入りのハ高島郡小入谷天増川
森西白谷四道の外なるべからずこれハいづれも
丹羽五郎左衛門の領知にして海津塩津を経ずに
爰許へ便宜の道なるをなし海津塩津にハ関を居
ゑり此砦へ入らんものの我耳に入ずしていかで往
来すべけんや然らバ若狭より小鯛得しとハ論に
及ばぬ偽なりそれ彼合せて思ふときハ其方の云
ところ一ツとして實ならぬすべて虚言ときこゆ

ゆへに譜第か新抱へかとさづねしなり譜第なら
バ将監と腹を合せて某父子を欺かりしな
るべし新参ならバ土地の案内知らぬ故實に将監
にだまされしなりいやしくも蜂須賀彦右衛門尉
なり山路如きが方便にかゝるべきや知さるとも
有るなりバ正直にいせその様によりて命を助け
て返しもせん愚にも虎の鬚をなで龍の領の玉を
覘ふくせものかなと云はれて角右エ門仰天し堂
木山の大将目どなりて御明察の段恐入ぬ某こと
まことに山路が譜第の侍にハいハず新参にて何で
も弁へしやさんかうくせよとや解られしまゝをや

述てもふ左せりある子細なりと存申さんにも愚さ
よと申すを彦右衛門さいく如何に角右衛門将監
が我等父子木村までを呼をハ酒もりせんといひ
立て三人ながら討てとらんず計策ならめそれを
知つゝ使に立しその方なり何とてそのまゝ返す
べきやと又立かゝるを角右衛門それまちねへ蜂
須賀どの某本性ハ濃州侍にて山路が家へ新参せ
しハ筑前守殿の内意によりてなり某をうちころ
しあひなバ筑前守どのゝ御意に叛きなぶべしと
いふをきゝ蜂須賀又十郎おどりかゝり推参なり
今井角右衛門おのれ山路が侍と名のり某父子を

あざむかんため此陣中へ入来り我父も山路が奸
計を見ぬりたされそれより種々と云ひまはし終
に至りて筑前守の内命をうけしなど云ふとても
誰かハこれを真實とせん尋常に覚悟して首を授
よと同じく切かゝれバ角右衛門今ハ詮方なく左
云ハるゝハ道理至極ならバうちあけ申べし是
御覧候へと懐中より取出したる筑前守殿の墨附
是にさ云へバ蜂須賀父子も猶豫ながら取上て
これをひらくに判形ハ正しく筑前守の自筆に相
違なく手跡ハいつもの右筆なり彦右衛門熟々と
よみ終りさても〳〵今に始ぬことながら筑前守殿

の思慮深く山路が心底を疑がひあひ今井を入り
こませ置かれしその拔目なさ怖ろしくかくなる
我等が上にも定めて隠し目附のあるならんと彦
右衛門父子互に目と目を見合せ拔さる刀を室に
納め今井角右衛門使者の趣心得たりとや鷄明
近づきぬ御茶の刻限相違なく父子相揃ふて参る
べし其時御礼ハなすべしと云バ角右衛門さし心
えたりに使者のかへり遅なはりしと氣をやき
將監めし逃りやせん直にうち立御出あれと云ハ
やことバに心をこめ今井ハ暇をつげてたち帰る
木村に使せし野村市内ハかくて木村と知るよし

なれバ直に山路が謀計を告げるにより小隼人用
意をとゝのへ蜂須賀父子を同道せんと彦右衛門
が陣所に来りしかバ彦右衛門今井が始末を語り
出し茶室に入れバ兎やせん角すべしと三人意と意
に示し合せ山路が陣所へ趣きぬ山路將監ハ使者
の帰りの遅きを怪しみ誓紙ハせしかど二人とも新
参なり若や木村蜂須賀に疑はれ大事を明せしか
さもあらバ此身の難儀如何ハせんと立つ居つ
案じ暮しけるが急度思ひ付我甥なりける山路多
八郎を呼びよせ火急の大事なり長濱にせ向ひ
我母我妻引き具し船にのり塩津海津のかさへ早

々立ち退きゆへ財宝に少しも目をかくべからず急げやくと下知し出しそその後こが陣屋に火をかけ焼立火事よしと呼わりくその紛れに中尾山の柴田が陣屋を志ざし取りのもとりに入べくさちのさはり木村蜂須賀ハ火の手におどろき馳せ付けみれバ山路ハ逐電行衛知れず早々うち寄り火を消しく事の本末筑前守の許へ注進す

筑前守山路が一類罪科の事
并山路佐久間軍談の事

此時筑前守秀吉ハ濃州大垣にありて岐阜の城をかこみ晝夜をわかさず鉄砲を放ち矢を射かけ一時

責に攻落すべしと短兵急にせり付あひける処へ木村隼人蜂須賀彦右衛門尉のもとより早馬をまひらせしかバ筑前守その使をみるより山路将監何としつる定めて砦を立のきしなるらめと云れしかバ木村蜂須賀の使大におどろき何として殿にハ知らせ給ひしならんと申けるにより筑前守それ体のを知ずして多くの軍勢を引率し鷲鷹の如き諸大将を使ふとあるべきやと云て大に笑ハれしかバ木村蜂須賀の使者かしこまり山路将監使者を以て木村蜂須賀を朝茶にまねきける処其使の口状に不審の事これありけるに付彦右衛門是

を詰問仕り候へハ殿の附かさあひしものあるを
りつく大かさ将監が謀叛の氣色も知候間木村と
申合せ逆寄によせ候ところにや将監め陣屋に火
をかけ焼立候くその紛れに立退て候手延に仕り
取にがし候と我々が油ざんかしこまり入り候さ
申されバ筑前守山路ほどのものに目を附けず人
並々に思ひしを去さハ盲人同様の大将さうかな
このいち心を附け候へ但し将監が母や妻ハ長濱
にあるべしこれも今ほど立のきつらんなれども
追かけなバ追止んをかたからじ藤堂源助にや参
れと下知せられしかバ源助かしこまり數十人の

兵士足軽を引率し飛が如く走行源助この時廿八
歳壮年ながら武勇と云ひ又早足なりしかハその
手のものどもすぐりにすぐりて名連れけれバ大
垣より長濱まで十三里を三時がかりにかけつけ
さり長濱にてハ山路多八郎筑前守より必定追手
をかくるならんそれに先ぞち當所を立ちのき一
先塩津海津に船を附け若州へ落ち行きそれより
本国へ帰り入らんと将監が母光に妻子とも船にと
りのせ漕ぎ出すすぐにその船十餘町を過ぎたる
ころ藤堂源助長濱に至り山路が宿所をとりまき
て穿議するにもや落さりと見へ門ハとざせど関

の木なく玄関書院の障子に隠まりゐられハ立入り
みれど人ハなし遅かりし悔しさよ然れどもいま
だ遠くハ行じかならず湖上を船にてむせぬらん
との共参れと聲かけて濱邊に至り早船一艘尋ね
出しそれに打のりかし出し浪間に艪をぞえやめ
ける山路が船ハ十餘町のびたりけるが比良の颪
に浪さか立あとへも先へもすゝまバこそゆりあ
げゆり下し一つところに漂よひけれバ足弱ども
ハ肝魂も身にそハず今にや湖中に身を沈むらん
と船底に倒れ伏し泣かなしむ有さま目もあてら
れぬ次第なりかゝるところへ藤堂源助船こぎよ

せ見れバ怪しき篷屋のうちなりしや夫ぞと乗移る
を山路多八郎のがれぬ処と手早に半弓引しぼり
切て放すを源助高虎心えたりと身をひらけバ其
矢ハそれて湖上に落つ南無三寶なむまてたりと多
八郎二の矢を打番ひ引きしぼる処を源助高虎や
つと声かけ抜うちに切てかゝる電光石火すきも
なうせバ山路が肩先より腰の下まで真二つに切
られ片身ハ船片身ハ湖中へ沈みけり篷屋に入
て泣沈む山路が女と妻とからめ取り直に濃州へ
引きかへし筑前守に此由を告られハ山路将監も
しめ柴田に背きて我手に従がひしふたゝび謀叛し

て伊賀守ならびに我等にそむく如是人非人の見
懲にせよとてふたゝび長濱につれ行きそれより
木本をそこし柳が瀬にいたり柴田が陣へ程近き
ところにて老母をそしめ妻子すべて七人山路将
監正國ハ四月十三日の夜謀計のかなはざるを知
て速かに我が陣処へ火をかけ火事よ〳〵とさハぎ
立そのまぎれに佐久間玄蕃が陣取し行市山へに
げ入たり玄蕃これを見ていかにやいかに山路将
監何とて只せきにせきて駈来るぞ陣処に火事あ
り何ぞぞと問れて正國大息つぎ木村蜂須賀を
うち取て當手へ帰参の土産にせむやと謀りしを

の調なれバその使に立し新参者が返り忠せしと思
せるゝによりて止ことを得ず當陣へおくりこみしと
語れバ玄蕃も氣のどく顔にてそれハ近ごろ残念
至極去ながら御邊の無事にて来られしハ味方に
取て大ひなる幸福なり木村蜂須賀が首を得ざる
ハ本意なけれど敵地の案内知たる御邊これより
味方の軍議に加はりて百戰百勝の奇計を施こし
給へと慰められ將監もすこし落つき長濱に残し
置つる老母や妻子の身の上を如何になりしと案
じ居たりしに程近きところにおほく人の集り来
つ何ぞをなすやと見れバこれぞ如何に將監が母と

妻子を磔にかけて棄去り正國これを見て身を
たせりけれど困めどせん方なく其まゝそこに闘え
絶してぞ伏たりけり佐久間が手の者一同にいか
さま將監心短かく欲深しされば母や妻子を見ご
ろしに殺しつるぞや人にあらじと爪はじきし
てこれを笑ふ

前巻本に將監が陣処ひそ〳〵とさそき出さる由
野村勝次郎が宿所より告知らせたる間則かく
と隼人佐に申ければすハ退きさるものにこそ
とく〳〵と引巻し尋ぬれば案の如く見えざ
りけり長濱にたる母をすぐからめに馬上五六騎
つかもし見れば早船にて忍びたりとなん番船
の者も熟睡してありしを山路將監が母の乗た
る船の艫番船の碇の綱にありしかば十艘の
番船一度にゆられ出これハ如何なる船か通る
にこそとて聲々に罵り出ければ案の如く知ら
ざる船見えつるによつて追かけ船を止見れば
山路が母妻子どもありかれられ七人番船へ取
入れ漕戻り隼人佐使者をもつて渡し侍りけり山
路が母妻子共七人秀吉へ上奉り謀反の様子委
志く木村や上しかば卯月十六日柴田陣取ちう
う逆むつつけにかけく山路これを見よくしと

高声に呼はれ〳〵どつと鯨波をあげどよめきに
けりと見ゆ
佐久間玄蕃ハこれを見て山路が心中を察しさぞ
かし正國憤怒に堪へざるべしよし〳〵これこれを
もつて敵陣を破るべき一方便を得たりと悦び早
く将監を呼び寄せ只今見あひしならん筑前守ハ
御邊のために老母の讐ありはやく討とり孝養に
備へあへ其後そくろめやべきあり餘所の見る目
どに口惜とも何とも云さん様なし何の砦を攻め
たらバ早く攻抜べきやと云ひしかバ将監も落る
涙に袖をひたしながら御察しの如く正國が腸千

断仕ゆあり筑前守が砦どりの容子も軍勢の多少
兵糧の増減まで大方に存じゆれバ賤が嶽ハ中に
及バず堂木山その外かすべて要害よろしく万事
の手配り行き届きてゆへバ匆々力攻に攻るとも
一朝一夕に攻破りがたくゆべし其上に砦より砦
を相互に救ひゆせり組合せたくゆ其備立まことに厳
重にして急々に落ちざるせうに構へくゆ間我等
が了簡にていづれも十日廿日をかけずハ攻落し
がたしと存じゆ但し大岩山の砦一ケ所これハ要
害も浅間なるうへ俄にこしらへたるとあれバ未
だ塀の土もかわきやらざ普請向すべて麁相にゆ

なひどこれを攻めはせバ容易く攻落しすべくと存じゐたりしが佐久間玄蕃盛政大に感心し何さま敵陣の虚實左ありにくはしく知れはうへを猶豫すべきにあらじ即時に打出これをやぶるべくは筑前守方の砦一ツ攻取りはゞ残りハ自然と破竹の勢ひにて落し可なり将監御邉ハ荒手なり案内者なり先陣しあへ但しハ後陣に詰あらうと云へバ将監佐久間に向ひ先陣ハ元より某が好むところ争で後陣に下るべき併ながら大岩山の砦をバ中川瀬兵衛清秀とて五畿内に名高き侍る守りてゐれバせりにせりて仕損じあるなよと云バ玄蕃ハうちわらひ中川とても鬼神にあらバこそ三面六臂と聞もおよばず将監見あれ盛政只一擧にうちかとし共瀬兵衛とやらの首を取て見すべきぞと勇みにいさんで山路を伴ひ勝家の本陣へ行向ひ帰参のよしを披露しけるに勝家も大ひに将監が志を感じ軍評定の列にさし加てけり

重修真書太閤記八編巻二十六終

重修真書太閤記八編巻之廿七

佐久間玄蕃允盛政中入の謀を議する事
并勝家盛政の血氣の勇を留る事

然程に佐久間玄蕃允盛政ハ山路將監正國が味方に帰参しつるにより賤が嶽よりして堂木山岩崎山大岩山等の要害の善悪人數の多少兵糧玉薬の數まで委細に知れるにより盛政中入の謀を思ひ乃山路將監を修理進勝家の陣処へ同道し勝家の前に於て羽柴方の備立手配りのやうを語らせ其語に就て中入し一時に數箇の砦をうち落さんと

を勝家に勧めしかども勝家たやすくこれを承引
せず盛政年若きが故に血氣にはやると云ども
軍ハ左もりに軽々しくなすべきものに非ずと云
を聞て盛政いきり高ふりて大音聲に申けるハ
なとや匹作にハ左程に猿面の藤吉郎めを奥深く
思し名すにや今夜深更て行市山の峯を傳ひ賊が
嶽の麓に下り立ち餘湖の渚を大岩山へ押し寄せ
無二無三に攻立なハゞ勝利を得んを眼前にゆ時
刻移りてその詮なし早々思ひ立給へやと勧めけ
るによりて勝家も此謀まことによしと勝家若き時なら
バ必定勝んと思へども今ハ老たり臆ふき軍ハ好

まじかりず殊に中入の戦ハかゝりの場所にてハ
たぶあしくと云ければ盛政大に氣色を損じい
や左にならりじ加様に長々と對陣に日を送るう
ちに岐阜も落城し蟹江の瀧川も追散され猿面冠
者めが美濃尾張伊勢国まで十かに手を入れ皈り
参りなハゞ後悔臍をかむ共其甲斐なるまじ賤ケ
嶽に籠りたる桒山修理亮羽田長門守ハ云に足ず
弟なにくゆへ共今ハ御子の紫田三左衛門勝政をし
て押へさせ堂木山に備たる木村蜂須賀等をバ金
森五郎八入道に押へさせ小川土佐守が備にハ淺
見但馬守をさし向かき盛政拜郷五左衛門宿屋七

左衛門水野権兵衛并に弟共を引率して中川瀬兵
衛が籠りたる大岩山へ罷り向ひ一時に攻破りし
ゆべし高山右近が陣へハ徳山五兵衛原彦次郎不
破彦三三人にて押へゆへ近作にハ旗本勢を後陣
となし権六勝久に前陣を許しめひ一同に攻かゝ
る氣色を見せゆハど若々に籠りたる猿が手の者
持場々々を氣づかふてかの約束の相互に救ひ救
をれんとの手配り忽ちに相違すべしその間に盛
政中川を追ひ落しゆべくハ一陣破れて残黨全か
らずとゆ本文もゆ大岩山どに攻抜ゆハどその餘
の若々ハ恐怖して攻ざるに逃去りゆべきなり然

らバ直に安土に参向し若君を守護し奉り五畿内
に向て合戦をいどむ程ならバ誰か我らにも向ふ
べきその處へ猿面冠者め帰り上りゆハど前後よ
り挾み討て是をうち破り猿が首を見んと三十日
の外へハ出ゆもじ共外の上方侍ハ氣色次第風に
なびく浮氣武者これらを静めゆに何の手間ひま
の入べきや今宵の軍ハ天下の落去時ハ得がたく
失ひ易し猶豫ハ後悔のもとゐなり思慮も分別も
入をうハと手に取得さるがごく計らひしゕバ柴田
勝家思ひかへし若武者なれども度々の手がらも
あり北国にてハ一人當千これが右に出るものな

さ盛政ありさらバ彼に任せて一當あてんと思ひ
定め盛政が謀る処まをにすぐ志く聞へさり我も
若き時ハ左ありにこそ振舞つれ但し中川が砦に
向ひ攻落すを叶もんぐ共面々の武勇の足ざる処と
云べからず急ぎ引返して後日の勝負を待あふべ
し血氣にはやりて抜がけすべからず勇氣をとの
みて深入するな今日の軍ハ柵に手をかけしだか
りも日比の首と思ふべしと下知しられバ佐久間
玄蕃允大に悦喜し山路将監を伴ふひ我陣所とせ
し行市山へ立戻り彼此用意に及び諸物頭以下そ
れぐに兵糧つかもせ馬に飼をつけそのゝち思ふ

子細あれバ十文字片鎌等の短き鎗ハ持べからず
とぞ觸さりけ是ハ中川が砦いまだ全く成就せ
ず然れバ塀越しの鎗あるべしと思惟せしが由へ
ありとかや
甫庵本に四月十七日暁天に秀吉長濱を立て同
日亥刻大垣に着陣し翌日十八日の早天に氏家
稲葉の勢を以て信孝の御領分こぐく放火しく
ばり十九日にハ岐阜に至て押寄攻落すべしと
の支度にて待りしかども夜半より雨おびたゞ
志く降出小せみあられバ其日ハとまりにばり
かゝる処に廿日の午刻佐久間玄蕃允兄弟不破

彦三原彦次郎徳山五兵衛尉上方砦々の要害を
バ丈夫に押へ置余語の入湖を左にあし廻り来
りて志津が嶽中川瀬兵衛が要害を打かこみ息
をも呉れず攻ハ旨飛脚到来せしかバ秀吉おど
ろきも去あそバさてハ大利を得ると思ひの日
加早かるべきぞ云々とあり
佐久間玄蕃允盛政諸方の手配を定めけるがまづ
賤が嶽の押へにハ柴田三左衛門尉勝政を大将と
して小原新七安彦弥五左衛門以下三千五百餘人
にてさし向けり又蜂須賀彦右衛門父子木村小隼
人佐が戍る所堂木山の砦をバ金森五郎八入道原

彦次郎をさし向小川土佐守が備へハ安井左近水
野助兵衛をさしむけ堀久太郎秀政が砦へハ浅見
但馬守を大将としてさし向山路将監を案内者と
なして先陣に立せその次に不破彦三以下勝りさ
る侍ぞかり三百餘人高山右近大夫長房が陣を押
へて操出せり其次に佐久間玄蕃兄弟の勢に旗本
よりの加勢を加へ四月十九日の宵より賤が嶽の
山中へさしかゝりけるに佐久間が組下に二宮勝
助と云老功の者ありけるが玄蕃に向ひ中川瀬兵
衛尉ハ勇猛世に許されし大将なり敵を砦に引受
て砦ぞかりを取れしと防戦しくハよも居るまじ

味方の足並に心を付少しも乱るゝと見るならバ
切て出追拂んと働らくならん折しも味方踏こ
たへ悉く引しらふ其隙に間道より中川が後陣
へ切かゝり未成就の砦へ火をかけて揉立させバ
瀬兵衛いかに猛しとも前後左右より攻らんに
ハ短氣の中川なり一陣に進んで戦ふならめ其時
味方引かへし無二無三に切りなびけなバ清秀
を討取んをハ安かるべしと謀りたるを玄蕃きく
より大に悦びその謀まことに神妙なり我も左なう
に思ひ付しかども事の多くて漏しさり其方その
手を引うけよとて神戸兵左衛門佐久間久右エ門

安次同源六實政に七百餘人を引かけて中川が後
陣を心ざし忍び入時分をはかりて火をかくべし
其上高山右近大夫が砦より援兵の為に出向ふな
らバ合戦すこぶる難儀に及ぶべし然らん時の為
とて徳山五兵衛に七百八十餘人をさし添玄蕃ハ
中軍にありて拜郷五左衛門を先に立浅井吉兵衛
宿屋七左衛門を左右に備へさせ水野權兵衛を後
陣にうたせ其勢三千餘人馬の轡の七寸結賤ケ嶽
の峯を下りにおし下し餘吾の湖邊を公方山の麓
へおしまはす然るに賤が嶽の案山修理亮が手の
池田仙左衛門太田半八が馬取共麓に流るゝ小清

水に駒の足を冷して居たりけるが横雲の絶渡る
ばひざより佐久間が人数の出来るを見て一人ハ
心早く賤が嶽へをしり返る二人ハ鬼角ばつかひ
けるを佐久間見付て忽ちうちとらし心地よしと
ぞよろこびけれ

桑山羽田中川を呼取る事
并越前勢中川が砦へ寄る事

賤ヶ嶽にてハ何心もなく居たりけるところへ馬
の足冷し居たる馬取一人をしり廻り大息つひで
申けれハ勢の多少ハ定かならねども越前勢大旗
小旗さしかざしをや寄せ来りては御用心はべし

と申けるにより羽田長門守義真いそぎ櫓に駆上
りて是を見るに何さま越前勢とおぼしく行市山
のかたより山々谷々の間々に満々たり旗馬じる
しの風に靡く景氣を見れバ幾千萬といふ數を知
ず然らバ必定當方へも勢を向るならん用意せで
ハかなはじと櫓を下り使者を以て中川瀬兵衛が
成り居る大岩山の砦へ申遣しけるハ只今越前
勢雲霞の如く寄来りては定めてそれへも寄るな
るべし但その御陣所ハ塀櫓その外作事いまだ全
く合期せずは其上に要害もよろしからば防戦の
たよりあしく承及は左様の所にて大敵を引受玉

なんと宜敷軍法と不存候いそぎ當方へ御入始終の勝を専と被成候半こそ御忠節なるべけれとやはうちしたる小中川瀬兵衛ハ敵の景気を見て人數死を定め防戦の支度をなし用意最中なりしが来山が使者来りつと聞て何事にやと思ひながら速に對面し使者の口状を聞をはり御懇者の条先以て辱く存候知きあふ如く當砦の要害よろしからず普請いまだ成就仕らず加様の所に楯籠り大敵を引受申こと危ふきこと申計りなく候但筑前守ならバ如是所にても防戦いたし候はんと存ずれバなぞ高山右近大夫と某をこの湖山の辺にこめら

れてはなり然るを某一人この所を引退候はんこと侍の道とぞんぜず筑前守の心の底もはづかしく候へぞ御口状に従て御砦へ引取がたく候この旨をもつて修理殿へ詳に申きといひもて中川瀬兵衛殿好むところの紺糸おどし同じ毛の十王頭の兜を取て猪首に着なし大身の鎗の刃廣なるを小侍にかつがせ旗おしたてゝ馬ひかせその身ハ床机にかゝりて立さりけり来山が使ひハ中川瀬兵衛が返答をきゝ天晴なる大将かな誰もかくこそいひさけれと感心しつゝ立かへりかくと告ぐれバ修理亮長門守こハ口惜や口状さがなさり

いかにも其砦要害よろしく防ぐたよりのあしけれバこれへ引いきといはれて然らバその意に従がはんと我等もいはし中川何某とく従ふべき死なしさり死なしさり此の砦の寄手はよし我等が力らに及ばずし御入あれやといひしならバ千にひとつおもひ返しもきべうりけるものをと両人ひとしくためいき継ぎてかゝり合ひ使者におむかひ大儀なれども今一度高山右近大夫が陣所へ馳むかひ越前勢雲霞のごとく寄来り候は定めてその砦へも取かけ可申候但其砦ハ味方を離れて連ぎの砦も程とおく候それにて合戦心元なく覚へ候此表へ

も大勢罷向ふと見え候へバ加勢を出し候はんをも唯ふおじく候一刻も早く此方へ御入候べし中川瀬兵衛へも其よし申つかはし候とやせと云ひ付て出し立さり使者高山が許に至り口状をのべ志かバ高山聞て御口状の趣つぶさに承まり候何さま越前勢出張の体に見受候必定味方を離れて普請もいまだ整ざれバ某が砦并に中川瀬兵衛が砦へ取かけ候と見え候夫に因て夫それ手配も仕り候事に候然るところ此砦ハ要害悪しく合戦難儀なるべし大勢にて要害もよく合戦も楽なるその御砦へつぼみ入候へとの御懇志ハ辱く候へども築

前守かくの如く引放しさる砦に右近参れと下知
せられしにより也へりにあたらさる処とも存ぜん躰
向ひ候ハなされ其時かへりのともに候ハんと存候ハ
バ断申て御一所に籠り可申ものを何氣なく受取
て候へバ筑前守のさし図なく砦を明け候とハ叶ひ
申まじき旨候但し是式の心得もなき右近大夫
と思し召れての御戯れか御使者大儀なり一獻と
申度候へ共物前にて万事とゝのひ申さずとて着
たる羽織を脱で使者に与へその身ハ馳廻りて
防戦の手配りをなしさらに承け引く氣色もなし
夜もすがらに明ければ越前勢大岩山の麓へ押よせ

鬨をどつと作りけれバ山谷にひゞきて夥し中川
瀬兵衛清秀ハかねて期しゐたることなれバ更におどろ
くいろもなく三千餘人を引分て持場々々をよく
固め弓いるものハ弦くひ志めし矢束をときて膝
に置き鉄砲うつものハ玉藥をこみ入筒先を狭間
に配りて待かけたり北國勢の先陣拜郷五左衛門
まつ先に進み士卒を下知して近々と寄かけ弓鉄
砲一志きり打やいなや塀下に上り乗んとせし処を
砦のうちに見すまし中川瀬兵衛時分ハよきぞす
ハ切てなせよと下知につれ待にまちたる弓鉄
砲を一度にさつと射出し打出しければ皆の子を

うちし如く魚鱗にならびし北國勢矢庭に六七十人ハ打たほさるれバ先に進みし勢ども少し白ケて見えけるを大将拜郷五左衛門尉久盈鞍がさに立上り是式ばかりの砦一ツを攻かゝりて攻落し得ずハ何とて故郷へ面を向くべきぞ爰にて死や者どもとせり立て下知しけれバ入替りて北國勢面もふらず二百餘人兜のしころを傾けて攻かゝる砦のうちよりも爰を先途と射かけ放ちかけて防ぎけれバ寄手また五十餘人うたれて引きしりぞく拜郷五左衛門走りまはりて味方をすゝめこめかへし打立しかバ北國勢すぐに塀に取付曳々聲

を出して攻けるを見て中川瀬兵衛真先にすゝみ柵門を押しひらき千餘人鑓の穂先を揃へて突て出る北国勢これをみて砦の大将中川瀬兵衛なり我討取て高名にせむやと火水になりて切かゝるされども瀬兵衛が形勢猛虎のむれて群がる羊をかる如く一鎗突てハかけ倒しくてハ突ふせ双廣の鎗の日にかゞやき流るゝ血しほの紅ハ秋の紅葉の散々に數十人をうちたふし扇開てうちつかひ北国勢の其中に我と思ん者あらバ切て出よへや中川瀬兵衛尉清秀なりと名乗つゝ手綱かひくり馬立直ししばし息をぞつぎ居たり拜郷

五左衛門これを見て望む所の中川瀬兵衛引包ん
でうちとれと下知しけれ共引立さる勢なり且ハ
只今の手並ハ見えたり右往左往に散乱し更に耳に
もきゝ入れず蜘の子を散すが如く逃去より拝郷
一人ふみ止まり中川勢に切てかゝり鑓を合せけ
るに中川勢もこれこそ先手の大将なれと目にか
けしかバ前後左右より揉合ひせりあひ戦ふたり
瀬兵衛尉これを見て柴田が家に拝郷五左エ門尉
とハ北国勢の随一なりいで打取て手柄にせんと
例の双廣の鎗をしごきなからとうちふり〳〵馳せ
向へバ拝郷が侍ども主を討せくかなもじと馬の

前に加け塞がり中川に向ひて軍すれバ瀬兵衛大
音あげ面倒なり北國武士名もきこへざる者共
幾百人うち取とりとも何かせんそこのけ〳〵と
罵り〳〵突きかくれバ五左エ門尉も中川を討んと
鎗とり直してかけ向ふに中川瀬兵衛ハ勝にのり北
國勢の渦巻て扣へさる真中へ面も振ず走り入り
無二無三に攻しかバさしもに猛き五左エ門
尉終にうち負けこの手すぐにやぶれんとせし処
へ大将佐久間玄蕃允盛政一陣にすゝみきたり
りの共軍ハかくこそすれ是を手本にせよとよバ
はり〳〵八尺あまりの金さい棒をうちふり〳〵中川

勢の矢面に立しものを前後左右にうちさはし切
たてし駒のりまはして戦へバかちほこりたる中
川勢思ひ〳〵四方へ散乱し立足しどろにそなへを
立かねたり佐久間勢ハ何れも穂長の鎗のさやはし
て鎗先をそろへて叩き立つるほどに中川勢より
返さんとなせしかども返し得ずすでに敗走せん
とせしところへ瀬兵衛が弟淵之助同じく小右エ
門こゝを破ぶられてハかなはじと一所に踏みと
どまりて戦ふをみて引きかへりたる中川勢氣を
はげまして立とゞまり一足も引な引かじといさ
みたゝひ切れども打てどもものゝかずともせず佐久

間が勢にはしりかゝりく息をもつかせず打ちすへ
うちすえ切りかゝれバ拝郷五左衛門取て返へし
入りみだれてぞ戦ふたり北國無双の打者達者
上方にく音にきこへし名誉の鎗と合ふてハ己か
れ己かれてを又一所に揉みたふたりさしも天帝修
羅の闘争もかくやと思ひしられたり佐久間ハ若
く勇めるうへに勝家に誓ひし詞もあり是非に中
川を討とらんとひしめけバ中川ハ又この砦にて
命をすてんと思ひ切たる軍なり親うたれても子
助けず主うたるれバ郎等ハ主の死骸をふみ越へ
ふみこへいどみたゝかふはげしさハよに目ざま

しく見(み)えたりけり

重修真書太閤記八編巻之廿七終